



第3回メルク「かけはし」文学賞 2018 受賞者発表
クレメンス・J・ゼッツ（作家）、犬飼彩乃（翻訳者）

2018年6月

メルク「かけはし」文学賞は、サイエンスとテクノロジーの分野における世界有数の企業であるドイツの Merck KGaA（以下メルク）と、ゲーテ・インスティトゥート東京による、作家と翻訳者に授与される賞であり、同賞の授与は2018年秋で三回目となる。本文学賞は、日本国内でのドイツ語圏現代文学の受容を奨励し、特に優れた翻訳活動の成果を賞するものである。賞は2年に一度、選ばれた作家とその著書の翻訳者それぞれに賞金10,000ユーロとともに授与される。



© Max Zerrahn/Suhrkamp Verlag

候補7作品の中からメルク「かけはし」文学賞審査委員会は、今回の賞をオーストリアの作家クレメンス・J・ゼッツとその日本語への翻訳者犬飼彩乃に決定した。クレメンス・J・ゼッツの様々に議論を呼んだ長編小説『インディゴ』の翻訳を提案したのは、犬飼自身である。

メルク「かけはし」文学賞審査委員会は、山本浩司（早稲田大学教授）を審査委員長に、土屋勝彦（名古屋学院大学教授）、関口裕昭（明治大学教授）、野口薫（中央大学名誉教授）、イルマ・ラクーザ（作家、スイス）、ラルフ・アナセンツ（メルク株式会社 代表取締役会長兼社長）ペーター・アンダース（ゲーテ・インスティトゥート東京、所長）の各審査委員で構成される。ゲーテ・インスティトゥート、ミュンヘン本部の文学・翻訳助成部長、ハイケ・フリーゼが顧問を務める。

授賞式は11月15日東京で、E.Merck KG パートナー委員会会長ヨハネス・バイユー並びに国内外から多数の来賓を招いて行われる。

翻訳の意義を述べる応募理由書の中で犬飼彩乃は、「テクノロジーの影響下で起こる人間の知覚の変容について、クレメンス・J・ゼッツ(1982年生まれ)ほど徹底的に考えた作家は他にいない」と書いている。「この小説は日本語でも紹介されるべきである。デジタル化時代、ポストモダン以後における現代ドイツ文学の最先端をこの小説が見せてくれるからだ」と犬飼は続けている。



© Ayano Inukai

広報

ゲーテ・インスティトゥート東京
堀口 典子

noriko.horiguchi@goethe.de

107-0052

港区赤坂 7-5-56,

Tel.: 03 35843201

www.goethe.de/tokyo

山本浩司審査委員長は選考の根拠を次のように述べている。「オーストリアの作家クレメンス・J・ゼッツは、「ナード」（オタク）を自認し、これまでのドイツ文学のお堅いイメージを根本的に塗りかえた。デジタル化時代に合わせてアップデートされたエキセントリックな彼の怪奇幻想物語は、奇矯なオタク的想像力によって支えられるばかりではない。遺伝工学やサイボーグ工学などポストヒュー

**GOETHE
INSTITUT**

Sprache. Kultur. Deutschland

マン時代の科学技術の知見を（時には悪びれずにエセ科学までも）食欲に取り入れた成果だ。著者自身と同名の一人称の語り手ゼッツが語るオートフィクション小説は、ファクトとフィクションとのゲームを究極にまで推し進め、ロマン派のドッペルゲンガーというモチーフにも新風を吹き込んでいる。このドイツ語による「ナード」文学は、ハイテクと「オタク」文化で世界に先んじる日本の読者にも大いに訴えかけるのはまちがいない。

優れたドイツ文学研究者である犬飼彩乃が卓越した翻訳者でもあることは、試訳の正確かつ生き生きとした言葉づかいを見ればわかる。ポップカルチャーやデジタルカルチャーからの隠された引用の典拠を丁寧に突き止めるなど、犬飼はまさに「おたく的」調査力にも秀でている。以上の理由から、審査委員会は全会一致で、第3回メルク「かけはし」文学賞を作家クレメンス・J・ゼッツと翻訳者犬飼彩乃に授与することを決定した」。

ゲーテ・インスティトゥート所長、ペーター・アンダースは、次のように付け加えている。「デジタル化が、われわれの世界に与えた変化は、後世にまで続く。このことが文学の未来にとってどういう意味を持つだろう？クレメンス・ゼッツは、その答えが見つかるという希望を与え、犬飼彩乃は、これに関して日本で行う必要のある対話の準備をしているのだ」。

メルク「かけはし」文学賞の次回公募は2019年9月に行われる。

問い合わせ先：

山本浩司

審査委員長/早稲田大学教授

hiroyam@waseda.jp

ミヒャエラ・ボーデスハイム

ゲーテ・インスティトゥート東京

図書館長

Michaela.Bodesheim@goethe.de